

ガウディが後世に託した夢の聖堂、完成への道

Gaudi and the Sagrada Família

サグラダファミリア聖堂、2023年1月撮影 © Fundació Junta Constructora del Temple Expiatori de la Sagrada Família



ガウディと サグラダファミリア 展

2023.6.13(火)——9.10(日)

東京国立近代美術館
The National Museum of Modern Art, Tokyo

PRESS RELEASE

MOMAT

Gaudi and the Sagrada Familia

企画趣旨

スペイン、カタルーニャ地方のレウスに生まれ、バルセロナを中心に活動した建築家アントニ・ガウディ(1852-1926)。バルセロナ市内に点在するカサ・ピセンス、グエル公園、カサ・パッリョ、カサ・ミラ、サグラダ・ファミリア聖堂など世界遺産に登録された建築群は、一度見たら忘れることのできないそのユニークな造形によって世界中の人々を魅了し続けています。ガウディの独創性は、西欧のゴシック建築やスペインならではのイスラム建築、さらにカタルーニャ地方の歴史や風土など自らの足元を深く掘り下げることで、時代や様式を飛び越える革新的な表現に到達したことにあります。

今回開催されるガウディ展は、長らく「未完の聖堂」と言われながら、いよいよ完成の時期が視野に収まってきたサグラダ・ファミリア聖堂に焦点を絞り、この聖堂に即してガウディの建築思想と造形原理を読み解いていくものです。図面のみならず膨大な数の模型を作ることで構想を練り上げていったガウディ独自の制作方法に注目するとともに、「降誕の正面」を飾る彫像も自ら手掛けるなど建築・彫刻・工芸を融合する総合芸術志向にも光を当て、100点を超える図面、模型、写真、資料に最新の映像をまじえながらガウディ建築の豊かな世界に迫ります。



1

ガウディの創造の源泉を探ります

ガウディはゼロから独創的な建築を創造したわけではありません。ガウディの才能は、西欧建築の歴史、異文化の造形、自然が生み出す形の神秘を貪欲に吸収し、そこから独自の形と法則を生み出したことにあります。「歴史」「自然」「幾何学」の3つのポイントから、ガウディの発想の源泉を探ります。

2

サグラダ・ファミリア聖堂の建設のプロセスが明らかに

この聖堂建設プロジェクトは誰の発案ではじまり、その後どう変遷したのか。模型を修正しながら聖堂の形と構造を探ったガウディ独自の制作方法に注目するとともに、140年を超える長い建設の過程でガウディ没後にプロジェクトを引き継いだ人々の創意工夫にも光を当てます。

3

総合芸術としてのサグラダ・ファミリア聖堂の豊かな世界をひもときます

ガウディはサグラダ・ファミリア聖堂において、聖書の内容を表現する彫刻の制作に取り組むほか、外観・内観の光と色の効果や、建物の音響効果にも工夫を凝らし、諸芸術を総合する場として聖堂を構想しました。本展では、ガウディの彫刻術にも焦点を当てることで聖堂の豊かな世界に迫ります。

4

サグラダ・ファミリア聖堂の壮麗な空間を空中散歩

NHKが撮影した高精細映像やドローン映像を駆使して、肉眼では捉えられない視点で聖堂を散策。ステンドグラスを通過した光が聖堂内を彩る景色の変化も圧巻です。マリアの塔が完成し、いよいよイエスの塔の建設という最終段階に向かうサグラダ・ファミリア聖堂の現在の姿を、最新の映像を通して伝えます。

ガウディ略年譜



1852年 6月25日、スペインのカタルーニャ地方、タラゴナ県のレウス市に生まれる。父は銅板器具職人。

1873年 バルセロナ県立バルセロナ建築学校（今日のカタルーニャ工科大学建築学部バルセロナ校）に入学。

1878年 建築学校を卒業し、建築家の資格を取得。
この年のパリ万国博覧会に出品した革手袋店ショーケースのデザインが、後にバトロンとなるアウゼビ・グエルに認められる。

1882年 サグラダ・ファミリア聖堂起工式。

1883年 サグラダ・ファミリア聖堂の二代目建築家に就任。
作品：カサ・ピセンス（～1885年）、キハーノ邸「奇想館」（～1885年）

1884年 作品：グエル別邸（～1887年）

1886年 作品：グエル館（～1890年）

1888年 バルセロナ万国博覧会開催。
作品：大西洋横断社展示館改造（現存せず）

1890年 グエル館竣工の記事が新聞に掲載され、建築家としての名声を博する。

1891年 夏、もしくは翌年初め頃に、二代目コミーリャス侯爵とアンダルシア地方の主要都市とモロッコのタンジールに旅行。

1892年 モロッコのタンジールに構想された
アフリカ・カトリック伝道本部の建物の設計に着手（実現せず）。

1898年 作品：カサ・カルベート（～1900年）、コロニア・グエル教会（未完）

1900年 「降誕の正面」の全貌が明らかになり、
サグラダ・ファミリア聖堂建設への社会的な理解が深まる。
カサ・カルベートがバルセロナ市の第一回建築年間賞を受賞。
作品：グエル公園（～1914年）

1904年 作品：カサ・パッリョの増改築開始（～1906年）

1906年 サグラダ・ファミリア聖堂外観完成予想図初公表。
作品：カサ・ミラ（～1910年）

1908年 作品：サグラダ・ファミリア聖堂付属仮設学校（～1909年）
作品：ニューヨークの大ホテル計画（実現せず）

1910年 パリのグラン・バレでガウディ展開催、
サグラダ・ファミリア聖堂の模型などが展示される。

1914年 他の全ての仕事から手を引き、サグラダ・ファミリア聖堂の建設に専念することを宣言、献金集めに奔走する。

1918年 バトロンであったグエル他界。

1922年 スペイン建築家会議がバルセロナで開催。
ガウディの功労を称える宣言を採択。

1926年 路面電車にはねられ死去。享年73歳。

世界遺産登録されたガウディ建築群
上から順に
カサ・ピセンス photo:鳥居徳敏
グエル館 ©スペイン政府観光局
コロニア・グエル教会 ©スペイン政府観光局
グエル公園 photo:山村健
カサ・パッリョ ©スペイン政府観光局
カサ・ミラ photo:山村健

《ガウディ肖像》1878年、レウス市博物館

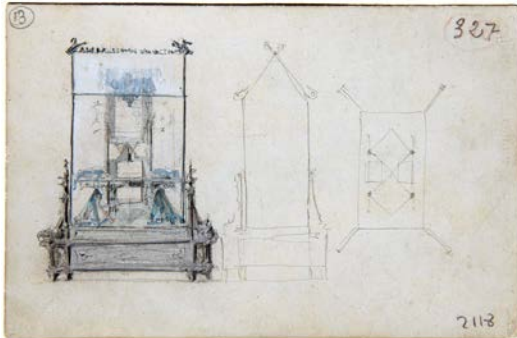
恥ずかしがり屋で人前に出ることを嫌ったガウディは写真嫌いでも有名でした。きちんと顔が映った無帽の写真は、これまで5枚しか確認されていません。このポートレート写真は、建築学校を卒業して間もない頃のもの。建築家の資格を手に入れ将来に希望を抱く若き日のガウディの姿がそこにあります。



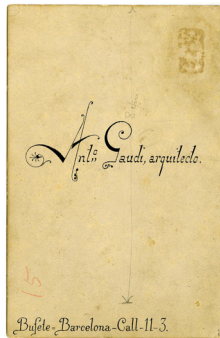
1

ガウディとその時代

ガウディが建築家を志してバルセロナ建築学校で学んだ19世紀の後半は、産業革命とそれに伴う都市人口の急増によって、ヨーロッパの都市がかつてない規模で変貌を遂げた時代にあたります。また、最新の科学技術や世界各地の文化、風俗、建築が一堂に会する万国博覧会が競うように開催された「万博の時代」でもありました。スペインでいち早く産業革命を達成したバルセロナでは、中世的な城壁を壊して都市の規模を拡張するなど近代化が推し進められ、芸術文化の領域でも前衛的なムーブメントが花開きます。この章では、時代が用意した視覚情報や、ガウディが1878年のパリ万博に出品した作品のスケッチなどを紹介しながら、若き日のガウディの活動と時代背景をたどります。



名刺の裏面



表面

ゲエルとの運命的な出会いのきっかけとなった作品

アントニ・ガウディ
《クメーリヤ革手袋店ショーケース、パリ万国博覧会のためのスケッチ》
1878年、名刺の裏、レウス市博物館

新進建築家として活動をはじめたガウディは、バルセロナで有名な革手袋店の経営者クメーリヤから、1878年パリ万博に出品するショーケースのデザインを依頼されます。ガウディは、細身の枠でガラスを固定する軽やかで瀟灑なケースを設計し、クメーリヤの期待に応えます。会場で評判となったショーケースは、バルセロナの資産家アウゼビ・グエルの目に留まり、その後ガウディのパートナーとなったグエルとの関係を築く機縁となりました。このスケッチは、デザイン案を名刺の裏に描き留めたガウディのオリジナル。

2

ガウディの創造の源泉

ガウディの独創的な建築はどこから生まれてくるのでしょうか。「人間は創造しない。人間は発見し、その発見から出発する」とはガウディの言葉です。その言葉通り、ガウディは古今東西の建築や自然を丹念に研究することから革新的な造形の契機をつかんでいくのです。学生時代のガウディは図書館に通い、当時普及しはじめた写真を通して建築の歴史を吸収しました。またカタルーニャの遺産を発掘して、地域に根差す自分たちのアイデンティティを再発見しようとする組織にも参加しています。さらに「自然は私の師だ」と言うガウディは、徹底した自然観察から造形の原理を引き出し、有機的なフォルムの建築や什器をデザインする他、自然の中に潜む幾何学に注目し、それを建築造形へと応用する合理的精神の持ち主でもありました。本章では「歴史」「自然」「幾何学」の3つのポイントから、ガウディ独自の建築様式の源泉とその展開をたどります。

2-1 歴史：建築のオリエンタリズム

多彩色(ポリクロミー)建築の源泉

1878年のパリ万博におけるスペイン館が、アルハンブラ宮殿を想起させるイスラム様式で建てられたことが示すように、19世紀の後半は、スペインが自らの文化の源泉としてイスラム建築を再発見した時期にあたります。また、19世紀には、ギリシア神殿がかつては極彩色で塗られていたという大発見とともに、建物の外観を色彩で装飾しようという理念が西欧で広がりました。このような多彩色(ポリクロミー)の建築を構想していたガウディは、カサ・ビセンスなどの初期作品で、スペイン・イスラム建築を起源とするムデハル様式に着想を得た斬新なタイル装飾を試みました。ガウディの独創は、その後、タイル破片を素材としたモザイク装飾の手法「破碎タイル」の表現の可能性を徹底的に追求したことにあります。



カサ・ビセンス
photo:鳥居啓敏



アントニ・ガウディ
《グエル公園、破碎タイル被覆壁》
1904年頃、
ガウディ記念講座、ETSAB(バルセロナ・デザイン美術館寄託)
© Museu del Disseny de Barcelona
Photo:Guillem Fernández-Huerta

ジュアン・マルトゥレイ
(アントニ・ガウディとリュイス・ドゥメナクによる製図)
《バルセロナ大聖堂大正面計画案》1882年、カタルーニャ建築家協会
© Arxiu Històric del Col·legi d'Arquitectes de Catalunya



ガウディの頭の中をのぞいてみよう

2-2 歴史：リバイバル建築 ゴシックを現代に継承し、乗り越える

19世紀の欧米では、ゴシック建築の復興を推進するゴシック・リバイバルの動きが流行しました。ガウディはフランスの修復建築家・建築理論家でありゴシック・リバイバルの論客であったヴィオレ・ル・デュクの著作を愛読し、ゴシック建築を深く研究しました。1882年、バルセロナ大聖堂大正面のコンペが開催された際、ガウディは建築家の師ジュアン・マルトゥレイのもとでネオ・ゴシック様式の設計案を描いています。しかし、翌1883年にサグラダ・ファミリア聖堂の二代目建築家に就任したガウディは、ネオ・ゴシック様式のオリジナル案から脱却することを目指します。ゴシックの伝統に挑戦し、より合理的な建築を追求したのです。

2-3 自然:生命のフォルム

生命を宿す装飾と建築

ガウディは、過去の建築装飾を参照するだけでなく、実際に目にした動植物をつぶさに観察し、しばしば自然を直接石膏でかたどることで装飾を造形しました。建築が生まれる場所の自然との具体的な関わりが重視されたといえるでしょう。カサ・ビセンスでは、敷地内によく茂った棕櫚の樹があったことから、その葉をかたどって鋳型を作り、連続するパターンをもとに門扉をデザインしています。このような自然をもとにした装飾の究極の形がサグラダ・ファミリア聖堂に結実しており、「降誕の正面」には植物や小動物をはじめとする生物の多様性が表現されています。



アントニ・ガウディ
《植物スケッチ
(サボテン、スライム、ヤシの木)》
1878年頃、レウス市博物館



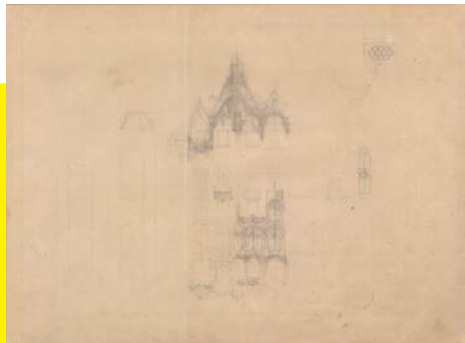
アントニ・ガウディ
《カサ・ビセンス、鉄網の棕櫚の模型》
1886年頃、サグラダ・ファミリア聖堂
*

カサ・ビセンス、棕櫚の鉄網

photo: 島根徳敏



アントニ・ガウディ《カサ・バトリョ、正面図》1904年、
ガウディ記念講座、ETSAB ※東京会場のみ出品
© Arxiu Etsab · Càtedra Gaudí, Universitat Politècnica de Catalunya (UPC)



カサ・バトリョ内観 ©スペイン政府観光局

部分



2-4 自然:大地の浸食造形

死と再生を象徴する洞窟へのロマン

19世紀は、地質学、考古学の発達とともに、地球と人間の歴史を解明すべく大地が掘り起こされ、自然洞窟や鍾乳洞が次々に発見されて洞窟観光がブームになる時代でした。ガウディもまた、スペインのマリョルカ島で有名であった鍾乳洞を訪れるなど、洞窟の自然造形に注目するとともに、古来より聖なる空間であった洞窟の象徴性にも関心を抱いていました。当時の洞窟ブームとガウディの建築には様々な接点を見出すことができます。例えば、ガウディも出品した1878年のパリ万博で話題となった海底洞窟を模した水族館の情景は、カサ・バトリョの造形と響き合います。



fig. 1878年パリ万国博覧会における水族館風景
L'illustration 1878年6月15日号に掲載

2-5 自然:つりあいの法則

理想のかたちの見つけ方

ガウディは、建物のバランスをとる理想的なアーチをもとめて、独特の実験を行いました。糸の両端を固定して垂らすと下向きの逆アーチができますが、そこに材料の重さを計算したおもりを下げて合理的な形を探る「逆さ吊り実験」と呼ばれるものです。写真はガウディがコロニア・グエル教会の設計のために実施した「逆さ吊り実験」の様子。ガウディはこの実験を撮影した写真を上下逆転し、その上に彩色をして教会のイメージを構想しました。

fig. ガウディによる逆さ吊り実験
*



アントニ・ガウディ《コロニア・グエル教会のスケッチ》
直筆のスケッチ(1908年?)に基づき1979年に制作、
リトグラフ、ガウディ記念講座、
ETSAB
© Arxiu Etsab · Càtedra Gaudí,
Universitat Politècnica de Catalunya (UPC)



《ニューヨーク大ホテル計画案模型
(ジュアン・マタラのドローイングに基づく)》
1985年、制作:群馬県左官組合、伊豆の長八美術館

2-6 幾何学:建築家は幾何学者

ガウディ建築のボキャブラリー

「柱は木の幹、屋根は斜面と頂上をもつ山、ヴォールトはパラボラ(放物線)断面の洞窟」と語ったガウディは、建築の形態は自然に由来すると考えていました。しかし、ガウディは自然から得たイメージに、線の放物線、立体の回転放物面、面の双曲放物線面といった幾何学を応用することで、合理的な構造を兼ね備えた独自の造形言語を発展させます。ガウディ建築の内部空間を特徴づける放物線アーチは、コロニア・グエル教会やサグラダ・ファミリア聖堂にいたって、回転放物面として建築の外観の造形に展開され、幻のニューヨークの超高層ホテル計画を生み出しました。

ジュアン・マタラ《ニューヨーク大ホテル計画案》1952年、
ガウディ記念講座、ETSAB
※東京会場のみ出品
© Arxiu Etsab · Càtedra Gaudí, Universitat Politècnica de Catalunya (UPC)



3

サグラダ・ファミリア聖堂の軌跡

ガウディの制作方法に迫る

3-1 ガウディ以前

スペインでいち早く近代化を果たした都市バルセロナの光と影の両面に触れながら、サグラダ・ファミリア聖堂建設を発起したジュゼップ・マリア・ブカベリヤの願いと、初代建築家フランシスコ・デ・パウラ・ビリャールによるネオ・ゴシック様式の計画案を紹介します。建設資金の調達方法など、この巨大プロジェクトの舞台裏にも注目。



ビリャール・イ・ロサーノ
《サグラダ・ファミリア聖堂、着工時の計画案側面図》
『聖ヨセフ帰依の布教』（聖ヨセフ信心会機関誌）、
1875年、発行：ブラ未亡人相続人書店、
サグラダ・ファミリア聖堂
*

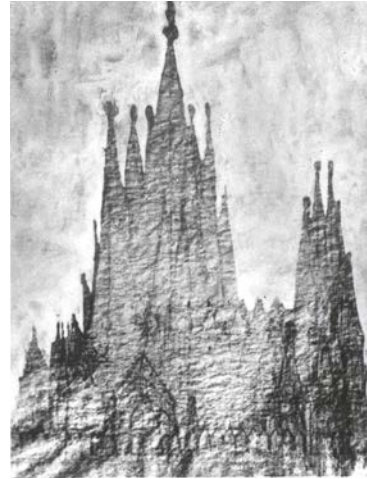


fig. アントニ・ガウディ
《サグラダ・ファミリア聖堂外観スケッチ》
1902-26年、ガラス版ネガからの焼き付け、
サグラダ・ファミリア聖堂
*



fig. サグラダ・ファミリア聖堂、1926年撮影
ガウディが完成を眼にすることができた
唯一の鐘塔の姿が見られる。
*

ガウディの手による
オリジナル模型や彫刻を紹介

3-2 ガウディ時代

ガウディが二代目の建築家に就任したのは1883年のこと。そこから1926年に亡くなるまでガウディはサグラダ・ファミリア聖堂の設計と建設に心血を注ぎました。ガウディは図面のみならず、膨大な数の模型を作りそれに修正を加えながら、外観や内部構造を練り上げていきました。このようなガウディ独自の制作方法をアトリエの情景とともに紹介しつつ、残された写真と模型をもとに計画案の変遷を明らかにします。とりわけ、樹木のように枝分かれした柱によって「森」を表現した内部空間、「降誕の正面」の建築造形の由来とガウディの彫像術、さらにユニークな形状と鮮やかな色彩が天空に映える「鐘塔頂華」（鐘塔の頂上につけられた装飾）にスポットを当てます。



アントニ・ガウディ
《サグラダ・ファミリア聖堂、側廊高窓模型》1883-1912年頃、
サグラダ・ファミリア聖堂
*

サグラダ・ファミリア聖堂の建設は、資金不足や内戦による破壊などを受けて、何度か中断を余儀なくされていますが、これらの危機を乗り越えて1882年の着工から140年が経過しました。ガウディが生前に関わることができた部分は、地下礼拝堂と「降誕の正面」に限られますが、その後歴代の建築家たちが、ガウディが残した写真や模型の断片を頼りに作業を継続してきた結果、いよいよ聖堂の完成が近づいてきました。この全体模型は2021年末のマリアの塔、2022年の福音書作家ルカ、マルコの塔の完成をふまえた最新の姿を示すものです。

photo:後藤真樹

《サグラダ・ファミリア聖堂、全体模型》2012-23年、
制作：サグラダ・ファミリア聖堂模型室、サグラダ・ファミリア聖堂
*

ガウディはゴシック建築を新しく解釈しながらサグラダ・ファミリア聖堂を設計していきますが、中世のゴシック教会と同様にガウディも聖堂の内部を森に見立て、樹木のように枝分かれした円柱が天井ヴォールトを支える独自の仕組みを考案します。このオリジナル模型は、枝分かれする円柱の「節」の部分。色味の異なるパーツが継ぎ合わされているのは、スペイン内戦時に破壊された模型の断片を、その欠損部分を補って復元した結果です。



アントニ・ガウディ
《サグラダ・ファミリア聖堂、主身廊円柱の柱頭模型》1918-22年頃、
サグラダ・ファミリア聖堂
*

サグラダ・ファミリア聖堂内観
*

《サグラダ・ファミリア聖堂、身廊部模型》
2001-2002年、
制作：サグラダ・ファミリア聖堂模型室、西武文理大学
*





fig. サグラダ・ファミリア聖堂、地下の模型室



fig. サグラダ・ファミリア聖堂敷地内、
ガウディ事務所の彫像倉庫

サグラダ・ファミリア聖堂の高くそびえたつ12本の鐘塔は、キリストの十二使徒を表していますが、ガウディは、とりわけその頂点の装飾デザインに工夫を凝らしました。最終案に到達するまでに20種類にも及ぶデザイン案を作ったといいます。様々な多面体と球体を組み合わせた複雑な結晶体のような形ですが、頂点に十字架を掲げ、その下には使徒の頭文字、側面には縦に祈禱句が刻まれていてキリスト教のシンボルとしても機能しています。ベネチア産タイルのモザイクによって赤、黄、金に彩られた頂華は、バルセロナの青空にひとときわ鮮やかに浮かび上がります。



アントニ・ガウディ
《サグラダ・ファミリア聖堂、
降誕の正面：花の浮彫》
1894-1905年頃、
サグラダ・ファミリア聖堂

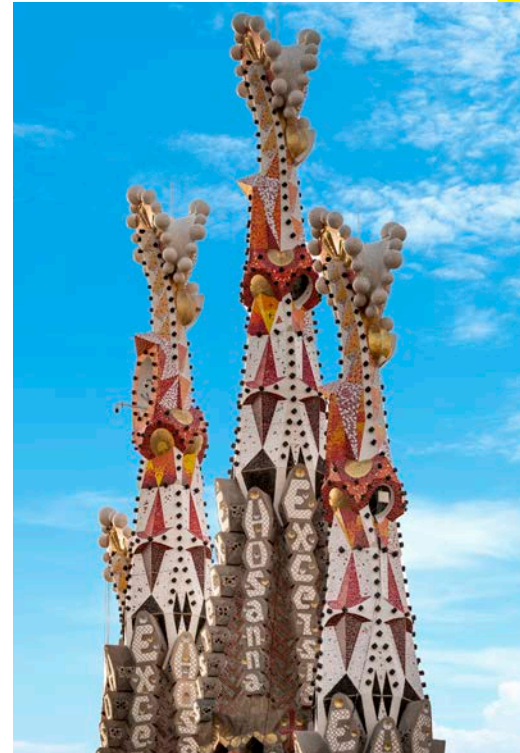


ガウディは、サグラダ・ファミリア聖堂の「降誕の正面」を、キリストの到来と幼・青少年時代を表現する「石のバイブル」として構想し、聖書の物語を表す浮彫と彫像で全面を装飾しました。ガウディは専門の彫刻家にその造形を託すことができず、自ら彫刻の制作に乗り出します。ガウディの彫刻術の特徴は、当時最新の技術であった写真を利用したこと、動物、人間など実物モデルからの石膏の型取りを活用したことにありますが、それを貫くのは自然に学ぶという態度です。本展では、スペイン内戦時の破壊を免れたガウディのオリジナル彫刻を紹介します。

アントニ・ガウディ《サグラダ・ファミリア聖堂、降誕の正面：女性の顔の塑像断片》
1898-1900年、サグラダ・ファミリア聖堂



《サグラダ・ファミリア聖堂、
降誕の正面：鐘塔頂華の模型》
2005-2010年、
制作：サグラダ・ファミリア聖堂模型室
サグラダ・ファミリア聖堂



サグラダ・ファミリア聖堂受難の正面、鐘塔頂華

3-3 ガウディ以後

ガウディの没後、スペインの内戦が勃発すると、聖堂の一部は破壊され、図面類は焼失、模型も粉碎されて建設は中断を余儀なくされましたが、ガウディによる備蓄基金をもとに、修復工事と模型の復元が行われて工事は再開。近年ではコンピュータの導入により設計と建設が連動して工事のスピードが早まりました。ガウディ以降の建設の推移を、「降誕の正面」を飾る外尾悦郎と「受難の正面」を飾るJ.M.スピルクスの彫刻を展示しながらとどるとともに、マリアの塔やマルコの塔といった最新の建設事情も紹介します。



外尾悦郎《歌う天使たち》
サグラダ・ファミリア聖堂、降誕の正面に1990-2000年の間仮設置、
作家蔵
写真提供：株式会社ゼネラルアサヒ

サグラダ・ファミリア聖堂、降誕の正面 写真提供：株式会社ゼネラルアサヒ



《サグラダ・ファミリア聖堂、マルコの塔模型》
2020年、
制作：サグラダ・ファミリア聖堂模型室、
サグラダ・ファミリア聖堂

「降誕の正面」の彫刻群のうち、中央の扉のすぐ上に9体の天使像があります。その制作を担当したのが、1978年以来サグラダ・ファミリア聖堂で彫刻家として従事する日本人・外尾悦郎です。外尾はガウディが残したわずかな資料を頼りに、これらの彫像を作りました。本展では、2000年に砂岩で制作された石像に置き換わるまで実際に「降誕の正面」に設置されていた、この石膏像を展示します。聴覚に訴えるだけでなく、親しみやすい姿と所作で、人々を聖書の世界に導く役割を果たしています。

いや、この聖堂を完成したいとは思いません。

というのも、そうすることが良いとは思わないからです。

このような作品は
長い時代の産物であるべきで、
長ければ長いほど良いです。
モニュメントの精神は
常に堅持されるべきですが、
しかし聖堂はその精神を
受け継ぐ幾世代もの
人々の意識次第で生きも死にもし、
そうした幾世代の人々と共に生き、
形を取っていくのです。

アントニ・ガウディ

4

ガウディの遺伝子

ガウディの建築は、そのユニークな造形や設計原理のみならず、社会の中で建築やモニュメントを成立させる思想的側面など、さまざまな形で後世に影響を及ぼしています。展覧会の締めくくりとなるこの章では、世界と日本におけるガウディの受容の歴史や、現代の建築家に与えた影響を紹介しながら、ガウディの遺伝子が21世紀の現在にいかなるアイディアをもたらしているのかを問います。

*サグラダファミリア聖堂、2023年1月撮影

サグラダ・ファミリアの 現在と未来

サグラダ・ファミリア聖堂の建設は、新型コロナウイルスの影響で一時的に中断していましたが、2020年の秋には再開。翌年の12月には、聖堂の中央に位置する6つの塔のうち、頂点に星を頂くマリアの塔が完成、続く2022年12月には4つの福音書作家の塔のうち、ルカとマルコの塔が完成しました。建設作業は現在も進んでおり、残るマタイとヨハネの塔は2023年11月に、聖堂中央の最も高い塔となるイエスの塔は2026年までの完成を予定しています。

ガウディとサグラダ・ファミリア Gaudí and the Sagrada Família

2023年6月13日(火)ー9月10日(日) 東京国立近代美術館 1F企画展ギャラリー

開館時間 10:00~17:00(金・土曜日は20:00まで) *入館は閉館の30分前まで
休館日 月曜日(ただし7月17日は開館)、7月18日(火)
主催 東京国立近代美術館、NHK、NHKプロモーション、東京新聞
共同企画 サグラダ・ファミリア贖罪聖堂建設委員会財団
後援 スペイン大使館
協賛 SOMPOホールディングス、DNP大日本印刷、YKK AP
協力 イベルドローラ・リニューアブルズ・ジャパン
学術監修 鳥居徳敏(神奈川大学名誉教授)

展覧会公式サイト:

<https://gaudi2023-24.jp/>

お問い合わせ:050-5541-8600(ハローダイヤル)

*入館方法、観覧料金等の情報は、確定し次第、展覧会公式サイト等でお知らせします。
*展示作品、会期、展示期間、開館時間、休館日等については、今後の諸事情により変更する場合があります。
最新情報は展覧会公式サイト等でご確認ください。

*会期中一部展示替えがあります。

東京国立近代美術館 竹橋
The National Museum of Modern Art, Tokyo

〒102-8322 東京都千代田区北の丸公園3-1 美術館サイト <https://www.momat.go.jp/>

●東京メトロ東西線 竹橋駅1b出口 徒歩3分

アントニ・ガウディ《クメーリャ革手袋店ショーケース、パリ万国博覧会のためのスケッチ》(部分)1878年、名刺、レウス市博物館

ガウディと
サグラダ・
ファミリア展

巡回情報

2023年9月30日(土)~12月3日(日) 佐川美術館
2023年12月19日(火)~2024年3月10日(日) 名古屋美術館

報道関係お問い合わせ先

「ガウディとサグラダ・ファミリア展」広報事務局
(ユース・プランニング・センター内)

〒150-8551 東京都渋谷区桜丘町9-8 KN渋谷3ビル4階
TEL:03-6826-1245 FAX:03-6821-8869
E-mail: gaudi2023@ypcpr.com